

なぜ保守化し、感情的な選択をしてしまうのか
人間の心の芯に巣くう虫

【立ち読み】

第一部 恐怖管理とは何か

第1章

人間は死の恐怖管理を求める…………… 14

人間の芯に巣くう虫／「文化的世界観」と「自尊心」の役割／死を思うだけで、判事の決断が変わる

第2章

文化的世界観によって守られる…………… 29

タオル地の母親、針金の母親／乳児の安心感の源／物事の成り立ちを吸収する／いかに子どもは死を知るか／自分は絶対に死まない／親から社会的な権威や制度へ／国旗と十字架／大切な信念を脅かされる／心安らぐ錯覚

第3章

自尊心が壊れるとき…………… 57

自尊心とは何だろうか？／なぜ自尊心は不安を和らげるのか／意義あることに尽くす／自尊心が壊れるわけ／低い自尊心が起す問題／ナルシストでも自尊心が高くない人／自尊心を育てる方法

第二部 文化の根源

第4章

儀式・芸術・神話・宗教の成り立ち…………… 86

想像力の豊かな霊長類／なぜヒトは「超自然世界」を考え出したのか／儀式——行動による願掛け／人間の文化の基礎となる／芸術の意義／神殿のあとに都市や農業が生まれた？／神話と宗教／農業・テクノロジー・科学の進展を支える

第5章

死を乗り越える方法① 文字どおりの不死…………… 107

不死を求めて／「魂」の不滅／煉丹術による不老不死／現代の不死研究

第6章

死を乗り越える方法② 象徴的不死

126

家族は永遠／名声と有名人の効果／富の力／ナシヨナリズムとカリスマ指導者への愛
／不死を確信しない限り、私たちは満たされない

第7章

なぜ悪と暴力が栄えるのか

154

自分の信念が乱される脅威／見下し、人間扱いしない／文化的に同化させる、手なす
ける／ステレオタイプに当てはめる／悪者にして滅ぼす／九・一一——悪と恐怖／邪悪
な相手の死は、自分の死の恐怖を和らげる／なぜ大義のために進んで死のうとするの
か／人類絶滅の危機？

第8章

動物性を遠ざける

183

動物と嫌悪感／苦行による浄化／化粧・身体改造／セックスと死は表裏一体／魔性の女

第9章

二つの心理的防衛

203

近位防衛と遠位防衛／無意識による起動／健康への影響

第10章

精神障害と恐怖管理のかかわり

224

統合失調症——死を拒む／恐怖症と強迫観念——死をすり替える／PTSD——打ち
砕かれた盾／鬱病——目に見える死／自殺——不死のために死ぬ／依存症——死を拡
散する／無意味・孤立・死から救い出す

第11章

死とともに生きる

253

人生の夢から目覚める／エピクロス派の癒し／二つの処方箋／死すべき運命を受け入
れよ／五つの超越モード／にっちもさっちも／問いかけ、答えよ

解説（※本書にはこの「解説」は付いていません）

こんな心理学の実験がある。

ある女性が売春の罪で起訴され、留置所から保釈されるのを待っている（という架空の裁判事例の実験だ）。この実験に参加した実在の判事たちは、二つのグループに分かれていた。一方のグループは、売春婦に標準的な保釈金を課したが、もう一方のグループはその九倍以上にもなる高額な保釈金を求めた。

判事とは公正で理性的な判断を旨とする仕事だ。それなのに、何がこれほど大きな差をもたらしたのだろうか？ 実は高額な保釈金を課した判事たちは、こうした判断をくだす前に、あるアンケートに答えていた。そのアンケートの中には、「死」にかかわる質問が入っていた。一方、標準的な保釈金を課した判事たちには、このような質問はされなかった。

死を思い起こさせられることが、判事たちの価値観（法律を守ること）を、さらに強くかき立てたのだ（なお、この実験の一部については、WIRED 日本語版 <http://url.work/BLU> にも紹介されている）。

ほかのさまざまな実験でも、人は死を思うと、自分たちの価値観や文化を強く守ろうとすることが明らかになっている。それは時に、自身をわざわざ危険にさらすようになりスキーな行為にも走らせる。たとえば、タバコを吸うのがカッコイイと思っている者は、より多く吸うようになり、クルマの運転を自慢している者は、より危ないドライブに魅力を感じるようになる。そうすることで、自分の意義を高

め、存在を脅かす恐れを払おうとするのだ。このような死の恐れは、意識される必要はない。むしろ、無意識のうちにあるほうが、より危ない行為に人を仕向けたりする。

こわいのは、こうした恐れが、自分たちとは異なる価値観・文化に属する他者を排斥する傾向をとることだ。「自分の死すべき運命について考えたあと、キリスト教徒はユダヤ人を侮辱し、保守派は進歩派を非難し、イタリア人はドイツ人を軽蔑し、……どこの人も移民をあざ笑うことが、研究で実証されている」。それだけではない。さらにこわいのは、特に知り合いでなくても、信念（たとえば宗教）の異なる者が事故などで死ぬと、自分の恐れが和らぐことである！

みずからの価値観を守り、文化・制度を守ろうとする「保守化」は、誰の心にも巣くっついていて、社会にさまざまな影響を及ぼす。たとえば、医学生が自分の死を思い起こさせられると、患者が延命を拒否しているにもかかわらず、できる限り長く生かそうと判断してしまう。政治についても、ジョージ・W・ブッシュ政権が、九・一一のテロを「邪悪なる者」との戦いとして、恐怖をかき立てることによって人々の支持を得たことは知られている。そして、もちろん、かのトランプ大統領だ（トランプ人気の背景については、本書の著者のひとりが『SCIENTIFIC AMERICAN』誌でインタビューに答えている。 <https://qq3q.biz/Amj1>）。

いつたいなぜ、それほど大きな影響力を死の恐れがもたらすのだろうか？ 本書の著者らは「恐怖管理理論（TMT: Terror Management Theory）」によって、その真相に迫っていく。

恐怖管理理論には二つの柱がある。ひとつは、「文化的世界観」であり、もうひとつは「自尊心（自尊感情）」だ。もともと幼児には母親のような〈安心感の源〉が欠かせないが、それは成長するにつれて周囲の文化的世界（モノゴトの成り立ち）への帰属感へと移っていく。

一方で、人間は生きていくうえで、自分には有意義な世界の価値ある参加者だという感覚（自尊心）も求める。そして自尊心が高い者ほど、心の奥深くにひそむ恐れを食い止めることができるのだ。

たとえば、自分を褒められ、自尊心が高まった被験者は、生理的にも不安を和らげることがわかつている。電気ショックを手首に与えるという実験（じつさいには電気ショックは起こらない）で、自尊心を高められた被験者は、高められなかった者より、汗をかく割合がかなり少なかった。自尊心は、メンタルはもちろん、カラダにも効くのである。

だが、なぜ、私たち人間には、文化的世界が必須栄養素のように不可欠なのか？ まさに、それは死の恐れと深いかわりがあるからだ。そのことを、本書は文化の起源にさかのぼり探っていく。

死を認識する生き物は人間だけであり、それは初期人類の自意識の副産物として生まれた。しかし、こうした死の認識による恐れに押し潰されてしまつては、か弱い動物である人間は生存できない。そこで発明したのが、「超自然世界」だ。持ち前の想像力によつて、こうした超自然世界を作り出し、死の恐怖を管理しえた集団がおのずと生き残つてきた

つまり、儀式・芸術・神話・宗教といった世界であり、こうした虚構に包みこまれることで、私たちは進展してきた。「人間には儀式・芸術、神話、宗教がありながら、農業、テクノロジー、科学があるのではない。それらがあつたからこそ、農業、テクノロジー、科学を進展させたのだ」

パプアニューギニアのある部族は、大人になるための儀式で、年上の少年や年長者にフェラチオをするという。ほかの文化的世界から見れば、異常にしか見えないことも、同じ信念・価値観を共有していればそれがフツーなのだ。そして、それぞれの共同体は内なる結束を強めるために、独自の言葉や文化・習俗を生み出し、守ろうとする。

だが、それらはじつさいは「心安らぐ錯覚」であり、「必要なそ」に過ぎない。私たち人間の生活は、こうした傷つきやすい皮膜の上に営まれているのだ。そして、死の恐れ（存在への脅威）が、その皮膜をつねに破ろうとする。私たちの日常のほぼあらゆる行動に、この見えない恐怖が影を落としている。

きわめて興味深いことに、死の恐れを無意識にせよ感じると、人はまたこんな行動も取りがちになる。

- ・ 高い買い物をしたくなる
- ・ 異性の肉体への興味が薄れる
- ・ 有名になろうとする
- ・ 超自然現象に関心を抱くようになる
- ・ カリスマ的指導者に魅力を感じる ……

さらに、本書ではさまざまな精神障害も、恐怖管理がうまくいかない症状として見直される。

昨今の保守化の潮流も、おそらく人間の本质にかかわる根深いものにちがいない。では、どうすれば、死とともにあり、より開かれた世界を築いていけるのか？ そのヒントは、ぜひ本書で確かめていただきたい。